

## 非暴力コミュニケーションによる つながりを広める



千葉県中央児童相談所所長 わたなべ 渡邊 ただし 直

### 1 児童相談所における子ども虐待対応

児童相談所（児相）は、子どもに関するあらゆる問題について、家族などからの相談に応じる行政機関である。現在は、虐待対応に多くの時間を費やしている。虐待問題は、子どもの安全問題である。行為者（主には親）の『しつけのつもり』といった意図を主にとらえるものではなく、当該行為言動を子どもがどうとらえるのかの視点で考える。子どもが怒鳴られ、叩かれ、痛い思いや、怖い思い、嫌な思い、辛い思いをする、必要な世話がされないなどの状況に曝<sup>さら</sup>されることは、子どもの人権が侵害される状況であり、子どもの安全・安心が脅かされている状態である。子どもは権利の主体者であり、単なる対象や客体ではない。それゆえに、子どもが大人からみて、してほしいことをしなかったり、してほしいことをしている状況があるからといって、親や同居人や周りの大人に、「何やっている」「いつも言ってんだろう」「〇〇するなって」「何回言ったら分かるんだ」「バカじゃないか」「今回は許さないぞ」「お前なんか生まなければよかった」とされない、つまり、怒鳴られたり叩かれたりしない権利を有しているのである。このことに係る国連の「子どもの権利」に関する「条約」を日本は平成6年に批准した。しかし、子どもが権利の主体者であることを国内法に反映させたのは、ユニセフからの再三の指摘（「児童を権利を有する人間として尊重しない伝統的な価値観により、児童の意見の尊重が著しく制限されている」）を受けて、批准から22年経過した平成

28年の児童福祉法改正であった。

### 2 不適切養育に曝<sup>さら</sup>されることによる子どもへの悪影響

虐待という人権侵害行為は、子どもの心身に深い悪影響を残す。その回復には、長期間の治療やケアが必要となる。悪影響は、虐待を受けていた期間（頻度）や、虐待の態様（深刻度）、子どもの年齢や性格等によりさまざまであるが、身体的影響、知的発達面への影響、心理的影響に及ぶ。このうち、心理的影響とは、本来最も安心を与えられる存在であるはずの保護者から侵害行為を受けることによって適切に欲求を満たされることがなくなり、基本的な信頼関係を構築できず、愛着形成困難となり、対人関係上の問題を生じさせてしまうこと、低い自己評価、多動や行動コントロールの問題、トラウマ（心の傷）、心的外傷後ストレス障害（PTSD）など、精神的症状がみられるようになることである。

### 3 虐待状況に曝<sup>さら</sup>された子どもへの対応

#### (1)失敗を意識させるよりも成功体験の醸成を

学校で日々出会っている子どものいわゆる問題行動といわれる行為の背景には、家庭内で上記のような不適切養育に曝<sup>さら</sup>されていたことによる“症状”としての行動表出の可能性がある。子どもができていない行動（don't）を頭ごなしに叱りつけたり、不用意に親に知らせるなどの対応をすることは、子どもとの関係をこじらせ、逆効果になることも多い。行動の背景を推察し「どうしたの」などの問

いかけから、同様の状況になったときのよりよい行動を前もって具体的に対策する。そして、できた時にはその行動を表現して、それができていること（do）を褒め明確化する。このような対応を意識することが、子どもの成功体験を増やし心の拠所（受容・自信）をつくることに繋がる。また、虐待を疑ったら、先生方ひとりで、あるいは一つの機関（学校）のみで抱えこむことなく、通告を必要な支援につながるきっかけとして、これからの対応について、児童福祉も含めて、ともに考えていける連携体制が必要である。

## (2)非暴力で人と人とがつながる基本を知る

非暴力コミュニケーションを各自が知り、対子どもだけでなく職員同士のつながりも非暴力のモデルとなれることが望ましい。パッケージとして非暴力を覚える「機中八策<sup>®</sup>」を紹介する。「機中八策<sup>®</sup>」は高度な専門性を持つペアレント・トレーニング（ペアトレ）ではない。行動・ことばをカード化して、暴力的な雰囲気醸成を醸し出し、そのカードを切られた人が青ざめてしまうような行動の切り札は、ブルーカードとして「ひ・ど・い・お・と・ぎ・ば・なし」の8枚、非暴力的な雰囲気醸成で、そのカードを切られた人がほっこり温かな気持ちになる行動の切り札は、オレンジカードとして「ほ・ま・れ・か・が・や・き・を」の8枚とし、頭文字つづりの合言葉で覚えられるように構成されている。これをチーム・ユニット・家族・地域のネットワークの中での合言葉とし、そこでお互いに声かけし、リマインドしあえるようになること、声をかけあって日常のコミュニケーションでオレンジカードが割合として多く切られる地域の文化が創造できるようになることを目指している。

## (3)分かっていてもついブルーカードを切る

ブルーカードは無意識的に切れるカードである。オレンジカードは手持ちの切り札とし

て既に持っているカードである。しかし、ヒトには感情があるので、意識しないとオレンジカードは切れない。そして、もしもあなたがブルーカードを切る傾向にあるならば、オレンジカードが切れるようになる「気づきスイッチ（装置）」として「機中八策<sup>®</sup>」を活用してもらいたい。日常生活でオレンジカードがスムーズに切れるようになるには「練習」が必要である。ヒトはオレンジカードを切られることで「これでいいんだ」という自信・自己肯定感・自己効力感が醸成される。たくさんの成功体験をしたヒトは、自分で自分のことができる、考えられるヒトとして育つ。

あなたは 相手がしてほしくない行動をした あるいは してほしい行動をしない そんな場面に直面した時 どの色のどの行動・ことばの切り札を切りますか？	
▼コミュニケーションを円滑にする オレンジカード	▼伝わりにくいコミュニケーション ブルーカード
ほ める(褒める)	ひ ていけい(否定形)
ま っ(待つ)	ど (怒)鳴る叩く
れ んじゅう(練習)	い や(嫌)み
か わり(代)にすることを提示	お ど(脅)す
が んぎょう(環境)づくり <small>いんげん ちからに おきかえ してゆく 環境</small>	と (問)う聞く考えさせる
や くぞく(約束)	ぎ (疑)問形
きもち(気持ち)に理解を示す	ば つ(罰)をあたえる
を ちづく(落ち着く)	なし なじる(人格否定形)
どちらの切り札の方が行動をスムーズに切り替えてもらえるでしょう	

図：「機中八策<sup>®</sup>」の頭文字つづり

## (4)不適切養育を容認する文化の修正に向けて

さらに、この非暴力コミュニケーションを通して、虐待が起きる前の予防策を社会的に構築していけたらと思う。社会全体の体罰や怒鳴る、デイスるなどのハラスメントに至りそうになる不適切養育を容認する育児文化の修正に向けて、「非暴力が当たり前の文化」が定着するため「機中八策<sup>®</sup>」をいち早く地域の合言葉とし、「ひどいおとぎばなし」より「ほまれかがやきを」そして「たくさんの成功体験を地域で」と展開できれば、これは新たなソーシャルキャピタルになると思われる。